

潜在的デジタル人材のキャリア探索の検討

溝下 博

(受付：2024年9月7日 受理：2024年9月7日)

1 はじめに

DXに対応する人材の確保や育成に向けた検討が盛んに行われている^[1]。高度情報人材の確保に向けて、文科省はデジタル等の成長分野に取り組む大学を支援しており、情報系学部・学科の新設や転換が多数行われている。経済界が大学に「社会や企業のニーズに対応した教育プログラムの迅速な構築・充実」を求め、大学側も大学教育の職業的意義を意識する傾向にある。

今後の課題は、大学での職業的で専門的な学びを学生がキャリアにつながられるかどうかである。本稿では、専門課程を経た学生が専門性を活かすキャリアを選択するためには、どのようなことが考えられるか、その方向性を検討する。

2 職業専門性とキャリアの選択

2.1 問題の所在

本田^[2]は、自身の調査から大学の専門分野によって、教育の職業的意義に差異があることを示している。保健や家政、教育、芸術などの分野では専門家養成的性格が強く、人文科学や社会科学は職業的意義の水準が低いとしている。工学系はその中間だとしている。

鎌倉^[3]は大学生の職業選択観の違いを調査し、理系の学生が文系よりも専門分野を特定の職業につないでいる割合が高いと述べている。一方、文系の学生は就職活動を行う際に自己分析や業界研究を行って、自分に合った職業を選んでいる割合が高いとしている。文系の学生は家庭や地域における周囲の期待や自分に求められる役割に応じて、柔軟に職業を選択している割合が高いとする。

文科省が実施した令和5年度学校基本調査によると、社会科学系の学生は全体の32%であり、人文科学は13.5%、

広島経済大学

工学が14.6%である。前述の傾向に照らすと、極めて多くの学生が学部・学科の専門性と関連の薄い職に就いているといえる。この調査には情報学という区分はないので、他の領域のいずれかに算入されているものとみられる。

冒頭述べたように大学で高度専門人材の育成に向けた機能が強化され、成長分野の教育を受けた学生が増えるとしても、成長分野のキャリアが選択されなければ、成長分野を牽引する人材の増加にはつながらないだろう。

2.2 キャリア探索の先行要因

キャリア探索とは、自身の適性や興味を追求し、自分に適した職業を探して選ぶことである(Super & Hall, 1978)。吉田^[4]の調査では、学生が職業選択にあたって重視していることの上位は、①仕事内容が好きだと思える、②収入が安定している、③成長できる、④私生活とのバランスがとれることである。「安定志向」「私」志向と解釈できるが、選択率が高いものでも20%であることから、職業選択に対する意識は多様であるとも述べている。

キャリア探索における先行要因として、自分のやりたいことに関する理解が深まれば、自分に合う仕事を見つけられるという期待感を指摘する調査もある^[5]。しかし、やりたいことにこだわってキャリアを探索すると、社会の求めに応じるといった視点が軽視され、進路の選択が困難になることもある。

石橋ら^[6]はこうした「やりたいこと志向」の二面性に注目し、「自己成長主導性」を媒介として、やりたい職業であれば、やりたくない職務であっても受け入れることができる意識や行動がキャリア探索に影響を与えていることを明らかにした。自己成長主導性とは、個人の積極的で主体的な成長過程への関与である(Robitschek, 1998)。自己成長主導性もまたキャリア探索の先行要因であるとされている^[6]。

2.3 専門性と自己成長主導性

専門職を志望する学生の「職業専門性志向」が「自己成長主導性」に及ぼす影響についての分析もある^[7]。「利他主義的志向」「自律性志向」が「仕事仲間との連携」や「知識・技術の習得と発展」「資格取得等」を媒介として自己成長主導性に影響を与えることが確認されている。キャリアは個人が積み上げていくものであるから、実行決定や自律性の影響を受けることは言うまでもない。しかし、キャリアの発達はそれだけでは十分でなく、他人の願いや期待に応える専門家として利他の精神を高める働きかけも有益であるとされている。資格や地位、権限を得ること自体が目的とならないように視野を広げる働きかけも有益であることが示唆されている。

2.4 キャリアモデルの影響

職業選択の意思決定の効力を表す概念に「進路選択セルフ・エフィカシー (CDMSE)」がある。CDMSE とは、進路を選択するにあたり、必要な課題をどの程度成功裏に達成することができるかの見込みをいう (Bandura, 1977)。CDMSE が低いと、進路の選択が自分にとって良い結果につながると考えていても、課題を解決できそうにないと考え、その選択を避けてしまう。

楠奥^[8]は、キャリアモデルを持つことが CDMSE を高めるといふ。キャリアモデルが CDMSE を高めるための重要な情報源になっているのである。手本となるキャリアモデルの経験を学ぶことが代理的経験になり、自身でも出来そうだとの見込みにつながる。

3 実践に向けた方向性の検討

3.1 社会からの求めにも耳を貸す

やりたいことを重視して自律性が過ぎると、他者から学ぶことに消極的になる。職業的専門家としての成長には、苦勞や困難を克服した他者の経験を学ぶことは有効である。長期的にやりたいことを実現するためには、その過程でやりたくない課題に取り組むことがあることを知らなければならない。「利他主義」の精神を高める働きかけを行う必要もある。資格や地位、権限を得ることが目的ではなく、社会的な必要性に応えるという視点を失わないことが重要である。

3.2 先達と接触できる環境

キャリアモデルを持っている学生が持っていない学生よりも CDMSE が高く、キャリアモデルには CDMSE を高める効果もあることから、キャリアモデルになりえる同じ専門分野の先達との接触の機会の多い環境が望まれる。

4 おわりに

現在、自治体と協力して学生が IT 関連企業の役職員から講義を受けたり、IT 関連企業と一緒に企業の課題解決を図る活動に取り組んでいる。実務家と協働することで、働き方や働きがいを理解し、デジタル人材としてのキャリアの視界をよくできればと考えている。

参考文献

- [1] 独立行政法人情報処理推進機構. DX 白書 2023, 2023, 独立行政法人情報処理推進機構
- [2] 本田由紀. 教育の職業的意義—若者、学校、社会をつなぐ, 筑摩書房, 2009, 224p.
- [3] 鎌倉哲史. 大学生の専攻による職業選択観の違い—文系・理系・芸術系・体育系の比較—. キャリアデザイン研究, 日本キャリアデザイン学会, 2022, 18 巻, pp.139-145.
- [4] 吉田佐治子. 大学生が考えている職業選択観と就職に必要な力. 摂南大学教育学研究, 2018, 第 14 号, pp.31-43.
- [5] 柳沢さおり・高野一郎. 大学生のキャリア探索. 西南学院大学人間科学論集, 2024, 14 巻 2 号, pp.103-119.
- [6] 石橋里美・林潔・内藤哲雄. 大学生における「やりたいこと志向」が自己成長主導性及びキャリア探索に及ぼす影響. 応用心理学研究, 日本応用心理学会, 2019, 45 巻 1 号, pp.68-75.
- [7] 石橋里美・林潔・内藤哲雄. 大学生における職業専門性志向が自己成長主導性に及ぼす影響. 応用心理学研究, 日本応用心理学会, 2020, 45 巻 3 号, pp.230-237.
- [8] 楠奥繁則・神藤貴昭・加野佑弥. キャリアモデルが A 大学の進路選択セルフ・エフィカシーに及ぼす効果. 徳島大学大学教育研究ジャーナル, 2023, 20 号, pp.67-73.